中区栄二丁目白川公園所在

白川公園遺跡第2次発掘調査概要報告書

1987

名古屋市教育委員会

例　　言

1．本書は、昭和61年12月1日から翌年の2月10日にかけて実施した、中区栄二丁目に所在する白川公園遺跡の発掘調査概要報告書である。

2．調査は、生命科学館（仮称）新築建設に伴うもので、名古屋市教育委員会によって実施された。

3．調査にあたっては、同市立名古屋科学館、同市建築局学校建築課、株式会社安井建設、鴻池・三井・中村特別共同企業体のかたに御協力を得、特に学校建築課、鴻池・三井・中村特別共同企業体には、現場事務所の提供を始め多くの御協力を得た。ここに記して謝意を表する。

4．調査は、名古屋市見晴台考古資料館学芸員平出紀男・野澤則幸・伊藤正人・服部哲也・竹内宇哲が担当し、本書作成は平出に因る。

5．発掘調査作業の内、排土工事部分については日本園芸建設株式会社が工事契約で実施した。また、実測作業も委託契約として国際航業株式会社と提携した。

6．出土遺物の内、陶磁器類に関しては愛知県陶磁資料館学芸員仲野泰裕氏の御教示を得た。

7．本書で用いた方位Nは真北を示す。海抜高は名古屋港工事用基本水面(N.P.)を用いた。

8．発掘調査の実施に際しては次の方々に御協力をいただいた。記して謝意を表する。
羽根潤至・立花伸・水野智・平林啓久（以上中京大学学生）特に、羽根潤至については概報作成にも御協力を得た。

本文目次

第一章　調査の経過
　第一節　調査に至る経過……1
　第二節　調査の経過……2
第二章　出土した遺構と遺物
　第一節　出土遺構……6
　第二節　出土遺物……9

図版目次

図版1　遺跡位置図（1：5,000）
図版2　明治時代遺跡付近図
図版3　土層セクション図（1：100）
図版4　出土遺物実測図（1;4）
図版5　出土遺物実測図（1;4）

写真図版目次

写真図版1　発掘区全景
写真図版2　遺構及び検出陶磁器群
写真図版3　陶磁器群・石垣
写真図版4　出土遺物（包含層）
写真図版5　出土遺物（SD01）
写真図版6　出土遺物（SD01）
写真図版7　出土遺物（1・2CGr. SK01）
写真図版8　出土遺物（1・2CGr. SK01・3CGr. SK02）
写真図版9　出土遺物（3CGr. SK02・3DGr. SK01・5AGr. SK03）
写真図版10　出土遺物（各種遺構）
写真図版11　出土遺物
写真図版12　出土遺物

第一章　調査の経過

第一節　調査に至る経過

白川公園遺跡は名古屋市のほぼ中央西側に位置する中区に所在し、現在都市計画公園になっている白川公園全域とすぐ南の通称百メートル道路までに亙る遺跡である。この遺跡は、比較的最近になって発見されたもので、同市の農政緑地局が企画したグラウンドでの遊水池建設工事がきっかけとなった。立合い調査をおこなったところ工事対象全域において、古墳時代～江戸時代にわたる遺物包含層と遺構の存在を確認した訳であった。この結果、同公園内で建築が予定されている名古屋市美術館、生命科学館（仮称）の工事区域も調査対象となり、事前にそれぞれ試掘調査を行なった。いずれの調査からも同時期の遺物が出土し、本格的な調査が必要となった。発掘の年間計画及び工事時期の関係から昭和60年度に同市美術館予定地、61年度に生命科学館予定地の発掘調査となった。

前年度に実施した美術館予定地の調査は、５月から二週間の中止期間を含めて４ヶ月かけて行なった。調査からは二ヶ所の発掘区から江戸時代から明治時代前半にかけての実に262基の墓壙群それとほぼ同数の人骨が検出されており、前述の試掘調査とは遺跡の様相が大きく異なっている。両発掘区とも墓壙群は密集し重複も夥しい状況であった。僅かに墓壙の掘肩の間に古墳時代の土師器、須恵器片を含んだ包含層が残存しているに過ぎない。熱田層の赤褐色粘性土の地山は、現在の地盤から30cmの深さで意外に浅い。この調査地点は、江戸時代南北に並ぶ寺院群であった。現在の科学館本館は、大林寺の跡地と推定されている。この大林寺の東側に南北に七軒の寺院が並んでいる。この内の養林寺の墓地と判明している。

生命科学館の調査地点は、大林寺の北西部にあたり下級武士の邸宅跡と推測されている。事前に試掘調査を２回行なっている。１回目は、美術館本調査期間中文化課学芸員が行ない、工事区域の東側部分に南北に25m のトレンチを設定した。調査の結果、南側は地山面まで攪乱を受けているが、その北側には遺物包含層、土壙等の遺構を確認し、出土遺物は江戸時代の陶磁器であった。また、翌年の４月に前回のトレンチより西側に十字状に小さな試掘坑を計13箇所設定した。現在の地盤面より深さ約 2.5m で近世の遺物包含層、 3.1～3.7m で灰青色の粗砂地山となっている。また、南から北に向けて地山のレベルが下がっているのも確認された。

以上の試掘調査から、工事全域に亙って遺物包含層が残存しているものと推測され、調査区も885㎡と比較的大規模な発掘調査となった訳である。

周辺の環境を見ると、白川公園以南の百メートル道路中央グリーンベルト帯の下に堀川につながる旧紫川が東西にはしり、今までの市教委の発掘調査から江戸時代中期から明治

時代にかけて存在していたのが判明している。この紫川は国道19号線との交差点で北側に折れ、そのまま南北方向に19号線下にあるものとみられる。さらに同公園北側で東に曲がり傳光院へと続く。傳光院に紫式部の墓があるため、この名称が付いたものと言われる。地形をみると、現在は平坦地となっているが、発掘調査から紫川に沿って名古屋台地の谷状地形になっているのが判明し、19号線に沿っても谷状になっている。この両谷地を利用して紫川を築いたものと思われる。また、北側の竪三蔵通遺跡が位置する台地から流れ込んだ縄文時代早期から晩期にかけての土器、弥生時代中期・後期の土器が湿地化した暗灰青色土層から出土している。

旧紫川遺跡の北に推定面積が約10万㎡に及ぶ竪三蔵通遺跡があり、ここ数年のミニ開発に伴う発掘調査がたびたび行なわれ、弥生時代から江戸時代に亘る複合遺跡である。この遺跡から南側に流失した紫川遺跡の遺物と照合すると縄文時代の遺物が無く、元々縄文時代の遺物及び包含層があったが、後世の削平によって消滅したものと考えられる。また、同遺跡内のⅡ次の栄小学校の調査地点でも実際にピット中から石匙が出土している。他に特殊なものとしてⅠ次の岡山病院・Ⅱ次調査地点で16世紀末から17世紀前半ごろの遺構、遺物が検出されている。Ⅰ次では暗青灰色砂シルトを埋土とする構内から16世紀末頃の鼠志野向付・美濃窯大窯末期製品、Ⅱ次では土壙から志野織部向付、白天目茶碗などが出土している。報告書ではⅠ次の大溝を城砦遺跡に伴うものと考えられている。慶長十五年（1610）に築造される名古屋城を始めとする城下町形成以前のものである。名古屋台地上で16世紀代の遺物を包蔵している遺跡はこの遺跡しかなく、注目される遺跡である。

第二節　調査の経過

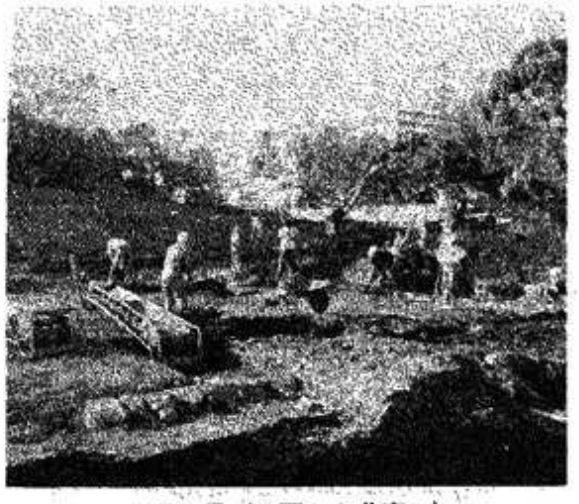
調査地区は同公園内の北西の科学館本館西側に位置している。調査対象面積は、前述したように885㎡と東西に長い南西隅の二辺が一部切られた長方形を呈した発掘区である。南北約25m、東西約36mである。試掘調査から遺物包含層が地盤面より－2.5mのレベルで検出されており、バックホウによる表土除去を行なった。表土は二層に分かれ、上層は盛り土で下層は戦災に伴う焼土、ガラなどの廃棄物を含んでいる。戦後に元々低かったここを廃棄物で埋めたことが窺える。また、北に向けて地山が下がっていると既述したが、南東約120mに位置する前回の美術館調査地点では地山が深さ約40cmであるに対し、調査区南端でも深さ2mありかなり急な斜面上に立地している遺跡である。

調査区南端は表土除去の段階で地山面が露呈し、取り合えず南側から地山に掘り込まれた遺構を確認しようとした。然し乍ら確認された掘り込みは、殆ど攪乱坑であり明治及び大正頃の通い徳利、陶磁器片が出土している。それより若干北側に東西方向に並ぶ石列が検出され、現存長11mで東端で南に曲がっている。石垣は北に面しており、石が三段積まれその間隙に赤灰褐色の漆喰土で化粧している。下端から高さ約70cmで現状より上は元々

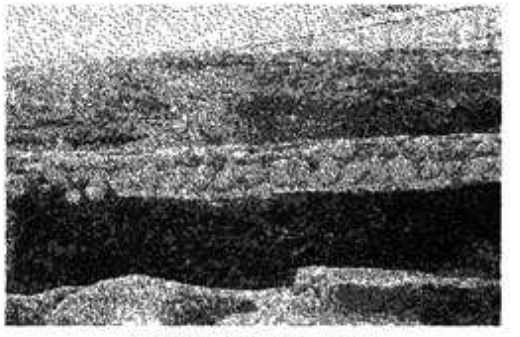
無かったようである。石材は全て河原石を使用している。南北に並ぶ石列は石垣ではなく、二列の石列で間は約50cmで矢張り漆喰を張っている。この石列は石垣に伴う建物に不随する排水構と思われ、加工された割石と河原石を混合して配置している。残存長約9mであった。南側東部分にも東西、南北とそれぞれ一列僅かではあるが残存しているが、伴出の遺物から時期的に新しいものと判明し位置を記してとりあげた。

発掘区東側は科学館本館建設に伴う掘削坑が想定され、本館際から東西方向にトレンチを数箇所設定した。その結果東端から約9.5m、南端から約26mの縦に長い長方形状の掘削坑であった。約250㎡縮小した。発掘区中央に南北方向に走る下水溝があり、これは当初から存在が確認されていた。この下水溝を重機で掘削することにした。また、発掘区東部分でも文化課に因る一回目の試掘調査坑が検出されている。

石垣南で検出した土壙状遺構は、当初石垣裏込めと思われたが石列に沿っていなく更に両側に延びているのが確認された。石垣以東でも土壙状遺構が続き溝と判明し、SD01と名づけた。埋土は暗茶褐色土を主体とし、江戸時代末期までの陶磁器が出土している。石垣以北部分は土層堆積がはっきりしないため、所々に試掘坑を入れ状況を見ることにした。発掘区北側は若干表土が残存しているため、先ずこれを重機及び人力で除去することにした。中央部分では墨褐色粘性土と地山（熱田層粘性土）が交互に堆積している土層が見られ、弥生土器・灰釉陶器片を採取したが本来の包含層では無いと思われた。包含層上端まで掘削し遺構及び攪乱の検出を行なった。攪乱の割合はかなり多く、戦時中の防空壕・井戸などがある。任意のラインでグリッド基準点を発掘区の比較的南寄りに東西にそれぞれ設定した。5m単位のグリッドとし北西の杭で命名した。南北に基準ラインを6とし北方



作業風景（南西から北東へ）



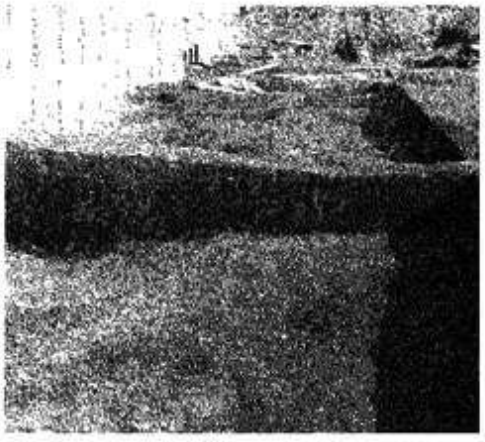
石垣列（北から南へ）

向に数が減少し、東西には西側基準点から東に向けてアルファベット順にした。その後、調査担当者である学芸員で付近の名古屋市多角基準点から国家座標をグリッド基準点に引照した。また、空撮作業を国際航業社と委託契約し、国家座標系も合わせて実施してもらった。両者比較するとほぼ同数値を得た。因に東基準点が、X－92,973.697m、Y－24,085.815m、西基準点が、X－92,976.436m、Y－24,122.472mを計測する。

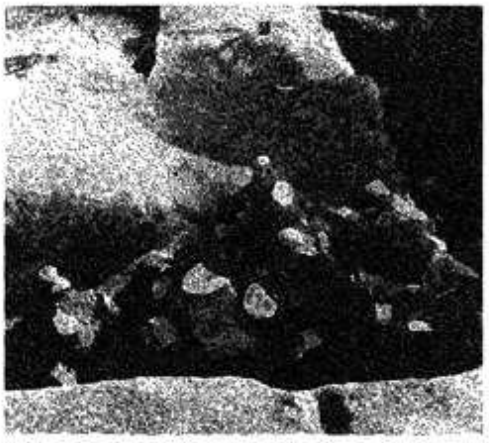
1AGr.1BGr.で黒茶褐色土の包含層が検出され、上層で弥生時代から中世期にかけての遺物を得た。また、3BGr.3CGr.では地山が露呈しており、遺構の検出を行なった。発掘区中央及び東側は、地山直上の茶褐色砂シルト約40cm程堆積し、その上に前述の黒褐色土と地山の交互堆積層が30～50cmがあり、恐らく斜面状地形であるため付近の地点から土砂を削って盛り土して平坦地にしようとしたものと考えられる。この層の拡がりは、石垣から始まり北へ約10mの所で無くなり、東側は南北の下水溝で切られている。石垣に伴ったものとも考えられたが、現場では確証できなかった。これも遺物を含んでいるため包含層扱いとして掘削することにした。茶褐色砂シルトの包含層は、3～5ラインのAからCまでの範囲まであったが、2ラインで黒褐色土の包含層にきりかわっている。

6EGr.SD01では幕末頃の陶磁器群が下部で検出されている。SD01は上部は後世の攪乱を受けているが、下部は残存しており、石垣よりもやや北側に向けて発掘区を東西方向に流れている。掘り肩は南部が良く残存しているが、北側は概ね他の遺構と切りあって本来の肩部はあまり残っていない。深さは南肩から約1.3～1.8mで、東より西のほうが深いようである。同様な陶磁器群は5DGr.でも検出されている。特列なものとして瀬戸・美濃窯の鉄釉播座香炉などが出土している。

1・2CGr.で検出されたSK01は南北7m、東西3.4mの縦に長い方形状の土壙でいくつかの遺構が切りあっているものと思われるが、東端部分に陶磁器群が出土している。そ



黒茶褐色土包含層（B軸南北アビ）



6EGr.SD01検出陶磁器群

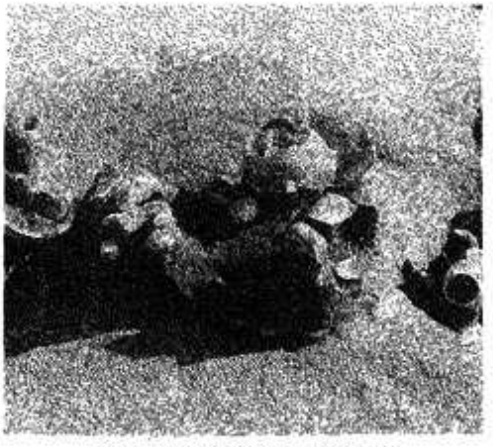
の他に土壙に伴った陶磁器群は、3DGr．のSK01、5AGr．のSK03' と3箇所あり、陶磁器の共伴関係上、興味深い。いずれも幕末期頃の遺構と思われる。写真撮影の後、取り上げた。

3CGr．のSK02からは、比較的古い江戸中・後期の陶磁器が出土している。SK02は、鉄釉天目碗、肥前系染付草花文碗、同じく肥前系と思われる京焼風の灰釉楼閣山水文碗で底部裏に「金村」の印銘が見られるものと若干前期の遺物も出土している。4CGr．のSK04からは、鉄釉天目碗、鉄釉陶製燈籠などの特殊な遺物も出土している。黒褐色土の包含層残存部分を除いて、地山に掘り込まれた遺構及び攪乱の検出をほぼ終え、ピット表に記した後掘削を行なった。しかしながら、地山が粗い砂層であるため流状に堆積した箇所も見られ、果して遺構扱いしていいものか判断に苦しむものもあったが一応ピット表に記して掘削を行なった。また、発掘区西4・5ラインのグリッドでは、遺構が密集しており、切り合い関係が複雑であった為、その確認に苦慮した。

また、前述した近世の茶褐色砂シルト土包含層の上に堆積している地山と黒褐色土との交互堆積中から、明治十五年（1882）、大正十三年（1924）の一銭銅貨がそれぞれ出土している。同茶褐色層からは、現場中の判断ではあるがほぼ幕末から明治にかけての遺物が出土していると思われた。

5EGr．でSD01の北側に淡黄褐色・淡茶灰色砂質土を埋土とする溝（SD03）が検出され、東西方向に発掘区東端から約5.5mまで続いている。深さは掘り肩から1.6mで、箱堀状を呈している。出土遺物は、3点しかなく明染付小皿底部片、常滑窯甕胴部片、志野織部鉄絵皿であり、この内明染付は16世紀末から17世紀初頭のものと思われる。この時期に対応する溝は他に無く、特殊な遺構である。

黒褐色土の包含層を掘削するが、その上層に茶褐色土の土層が堆積していた。セクショ



5AGr.SK03'検出陶磁器群

1・2Gr.SK01検出陶磁器群

ンから観察すると、2BGr. から始まり北に向けて厚く堆積し、北端では50cmであった。近世の包含層である茶褐色砂シルトとは別な土層であり、弥生から中世までの遺物を少量含んでいる。下層の黒褐色粘質土も北側及び西側に傾斜して堆積しており、少量の縄文時代晩期土器片の他に弥生時代後期の欠山・古墳時代元屋敷式の土器を殆ど含んでいた。土質の状況から湿地状の堆積層と思われ、恐らく南側の高い台地から流れ込んだものと考えられる。その下の地山面にはこの時期に対応する遺構等は検出されなかった。

この包含層の掘削をほぼ終了し、その他の殆ど近世期の遺構の完掘の確認後、空撮の準備をすることにし、清掃作業に着手した。2月10日にクレーンによる空撮を行ない、遺物搬出を以って現場の全作業を終えた。

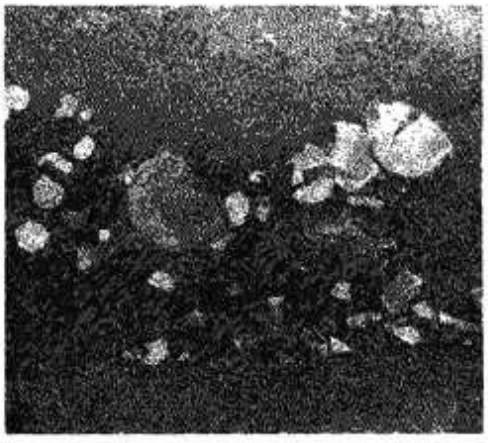
第二章　出土した遺構と遺物

第一節　出土遺構

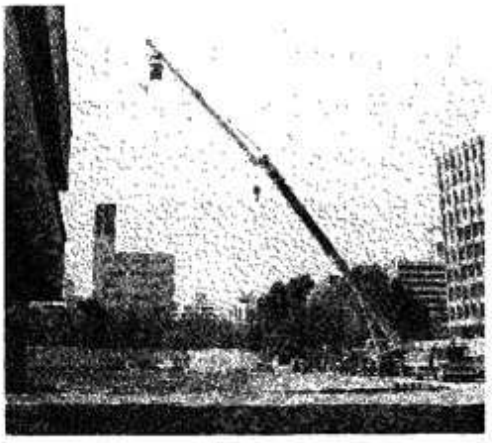
今回検出された遺構は、全て近世期に属し土壙54基、小規模な溝を含めたもので7条、井戸跡3基、ピット約80基、石垣一箇所と検出されている。前述したように遺構が密集しているグリッドも多く、遺構の重複及び切り合い関係が複雑であった。ここでは、すべてを紹介する余裕もないので調査中注目された遺構について概略的に述べたい。

石　垣

6Aから6CGr. の南端で検出された東西に残存長11mの三段積みの石垣である。石の間隙に漆喰土を詰め化粧している。漆喰の壁面に稜を付けているもので、旧紫川遺跡Ⅰ次及び竪三蔵通遺跡Ⅴ次調査でも、同様な石垣を検出している。旧紫川では護岸壁で高さ2.2m、竪三蔵通では建物跡に付随するもので高さ2mあった。恐らく、竪三蔵通Ⅴ次調査



5DGr.SD01検出陶磁器群



空撮風景（東から西へ）

地点は台地の縁辺部で南の旧紫川に向かって大きく傾斜しているため、平坦にするために築造されたものと思われる。いずれも、幕末頃と推定されている。白川公園遺跡も北に向かって下がっていることから、同様な事由で築かれたものと考えられる。但し、竪三蔵通よりは傾斜度が低いため三段の石積みとなったようである。また、旧紫川の石垣下端には木材を敷いて所々に杭を打ち込んでずれないようにしていたが、この石垣には見られなかった。このような築造方法は、西区の幅下小学校遺跡の石垣にも見られ、石自体の自重でバラバラに沈まないように工夫したものと思われる。

建物に付随した石垣と思われるが、裏込め部分が殆ど無く時期的に確定しうるものは無かった。この調査地点は前述したように江戸時代の絵図からは、下級武士の邸宅跡であり時期的にそれぞれ人が変り住んでいたのが窺える。また、すぐ南に寛永五年（1628）に瀧川豊前守忠征によって創建され、代々瀧川氏の菩提所であった大林寺がある。大林寺に関係した石垣とも思われるが、その確認は出来得なかった。

溝　跡

溝跡は７条検出されているが、小規模な溝状遺構も含めているので溝と確認されているのは２条である。

SD01　発掘区の南側を東西に貫いて走る溝であり、幅3.5m、深さは東端で1.2m、西端で1.95mと断面がやや丸いＶ字状を呈している。東部分では上層が後世の攪乱を受けて石垣、土管などが見られたが、中央以西は攪乱されていなく盛り土の下層が埋土となる。茶褐色砂シルト質土が主体である。6CGr.から6EGr.にかけてその下層から陶磁器群が並んで出土している。碗・皿・徳利などの供膳形態用具、灯明皿・火入・壺などの日常用具、土瓶・汁次・焼塩壺などの調理用具、陶製人形・香合などの特殊なものを含んでおり、生活の息吹を窮わせるものである。この内、志野絵小碗で高台裏側に「春岱」の銘があり、尾張国赤津窯の陶工加藤宗四郎春岱（1802～1877）の作品と思われるが、贋作の可能性がある。いずれにしても幕末から明治時代前半にかけてのものと推測され、この時期に溝が埋まったと考えられる。遺物の時期幅を見ると、18・19世紀代のものが大半であり、若干京焼風の灰釉山水文皿などの17世紀代の遺物も含んでいる。土層の堆積状況からも急激に埋まったものではなく、徐々に堆積したようであり使用された時期はかなり長かったものと思われる。江戸時代の城下町絵図には、この溝は描かれていないようである。

SD03　幅約３m、深さ1.5mの箱堀状の溝である。発掘区南東端の５E・５FGr.で検出され、SD01とほぼ同方向に発掘区端から約5.5m　あり、そこで途切れている。埋土は地山に近い淡黄褐色砂質土であったため、検出及び掘削に手間取った。出土遺物は前述したように３点しかなく、時期も江戸時代前期の17世紀中頃が下限であると推測される。この年代の根拠は出土した志野織部鉄絵皿であり、見込に鉄絵に因る草花文？に若干長石釉が混

じった灰釉が施される。美濃窯製品で窯ケ根窯に多く類例がある。江戸時代の遺構群の内で最も古い溝跡と思われる。然し乍らこの溝に対応する遺構は、付近では検出されなかった。この遺構の性格は現状の段階では判断できえない。

土　　壙

土壙は約50余基検出した。特に発掘区中央では密集しており、単一の遺構として掘削すると別な遺構が検出され、重複関係が複雑であった。従ってピット表には同じ遺構であっても形状が不規則な形であるところは、できるだけ方形及び円形を単位として記し遺物をそれぞれ採りあげた。地山が砂層であるため水作用によって流状に堆積した場所もあった。以下、代表的な土壙を紹介したい。

SK01（2CGr.）南北に細長い長方形状の土壙であり、長辺7.4m、短辺3.5mで深さ約45cmである。南端は不規則な形状で別な土壙が切り合ったものと思われた。その証拠に陶磁器群がこの遺構内の東端中央に縦状に並んで出土していた。陶磁器群は２ライン以北では無くなっている。埋土は暗茶褐色土層で炭化物を含んでいる。北側の底部は、所々に窪んだところが数箇所あったが、位置を記してそれぞれ遺物をあげたが少量であるため時期は判明しない。陶磁器群はコンテナで10数箱分出土し、瓦、石もあった。幕末の19世紀前半から中頃と推測される。若干の18世紀代の遺物も比較的多く出土している。中には、美濃窯織部鉄絵皿、灰釉輪花皿、伊万里窯染付皿と17世紀代の陶磁器も2,3点あった。器種からみると殆ど日常生活用具であった。

SK02（３CGr.）一辺を約１ｍとする方計の土壙で、深さ約50cmである。出土遺物は、鉄釉天目碗、染付草花文碗、灰釉楼閣山水碗（底部裏側に金村の銘がある）、灰青色の長石が混じった灰釉が掛かる碗で割高台になっているものと特殊な遺物がある。時期的には、前述のＳＫ01よりも古い遺構である。また、すぐ南東に同様な土壙があるが、出土遺物は少なく同時期のものとは確認できない。

SK01（３DGr.）南北下水溝の東壁周辺で検出され、当初はもっと遺構は広かったが、掘削すると北端で東西に長い方形状の土壙が検出され、その土壙内に陶磁器群が出土している。時期は殆ど幕末一杯で19世紀後期と推測される。陶磁器の他に煙管、銅輪、碁石、銅銭（内１枚は寛永通宝）などが出土している。

SK03'（５AGr.）当初、不規則な形状で検出したが、やはり切りあった土壙の遺構であった。東部分で比較的浅いレベルでまた中央のところで其より低いレベルでそれぞれ陶磁器群が検出されている。ほぼ幕末頃の遺構と思われる。

井 戸 跡

井戸は３基検出され、ほぼ直径を１ｍの円形井戸で全て素掘りである。その内、１ＣＧr.で検出されたSE01は、周囲に一辺を2ｍとする方形の掘り肩を有し一部東端はＳＫ01に

よって切られている。出土遺物は少なく僅かにSE03（4CGr.）から織部向付、陶製狛犬人形が出土している。織部陶片は、再生であり時期は幕末頃と思われる。

第二節　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナで約150箱で殆ど近世期の遺物であった。調査期間が年度末に近かったため、遺物の水洗は一部しかしていなく整理も済んでいないことから、ここでは調査時で判明したことだけを記述したい。

縄文時代

黒褐色土の包含層から弥生時代土器と共に出土し、単一の包含層はなかった。外表に条痕文が施された土器が主体であり、晩期後半頃と推定される。他の時期の土器は出土していなく、比較的時期のまとまった土器である。旧紫川遺跡の縄文土器群では、早期の押型文土器から晩期まで多少各時期を欠いていながらも継続しているに比し、19号線（元の地形は谷地）を隔てた白川公園遺跡が立地する台地には晩期しか居住していなかったようである。その他、石製品などは出土しなかった。

弥生時代

前述の黒褐色土から比較的多く出土し、コンテナで10数箱あった。時期は弥生時代後期の欠山式から古墳時代元屋敷式までであり、器形は壺、甕、高坏などであった。特殊な土器として線刻文が施された壺破片が2点出土している。その他、石製品などは出土しなかった。いずれも縄文土器と共に南側台地上から流れ込んだ遺物群である。

歴史時代

古代から中世にかけての遺物は少なく、黒褐色土上に堆積する茶褐色土から出土している。また、原位置を保っていないが盛り土中からも出土している。須恵器杯、山茶碗、小皿、陶丸などが出土した。この茶褐色土層の形成時期は、出土遺物から中世期と思われる。

近世の遺物は言うまでもなく調査の出土遺物のほぼ90％を占めている。然し乍ら、従来の江戸時代の遺跡である旧紫川、幅下遺跡のように江戸期の遺物が前期から幕末まで一括に出土しているに比し、台地の末端ではあるが土壙及び溝と単一の時期相陶磁器群と瀬戸・美濃窯の陶器と佐賀県の伊万里窯磁器との共伴関係を確認する上で重要な遺跡と思われる。また、竪三蔵通遺跡について触れたように城下町形成以前の遺構が検出されているが、本遺跡でも遺構に伴っていないが16世紀代と推定される遺物が2、3点出土している。また、SD03の様に江戸時代前期前半頃の遺構が検出されていることからも、城下町築造については本遺跡が名古屋城下町の南西端に位置することから当初から全体の町割区画を策定し且つ築造していたと窺える。

整理途次で目についた遺物を若干紹介したい。SD03で出土した明染付小皿は、見込に艶麗なコバルトで八宝、外側高台周囲に蓮弁状の文様を描いている。高台畳付け部は、露

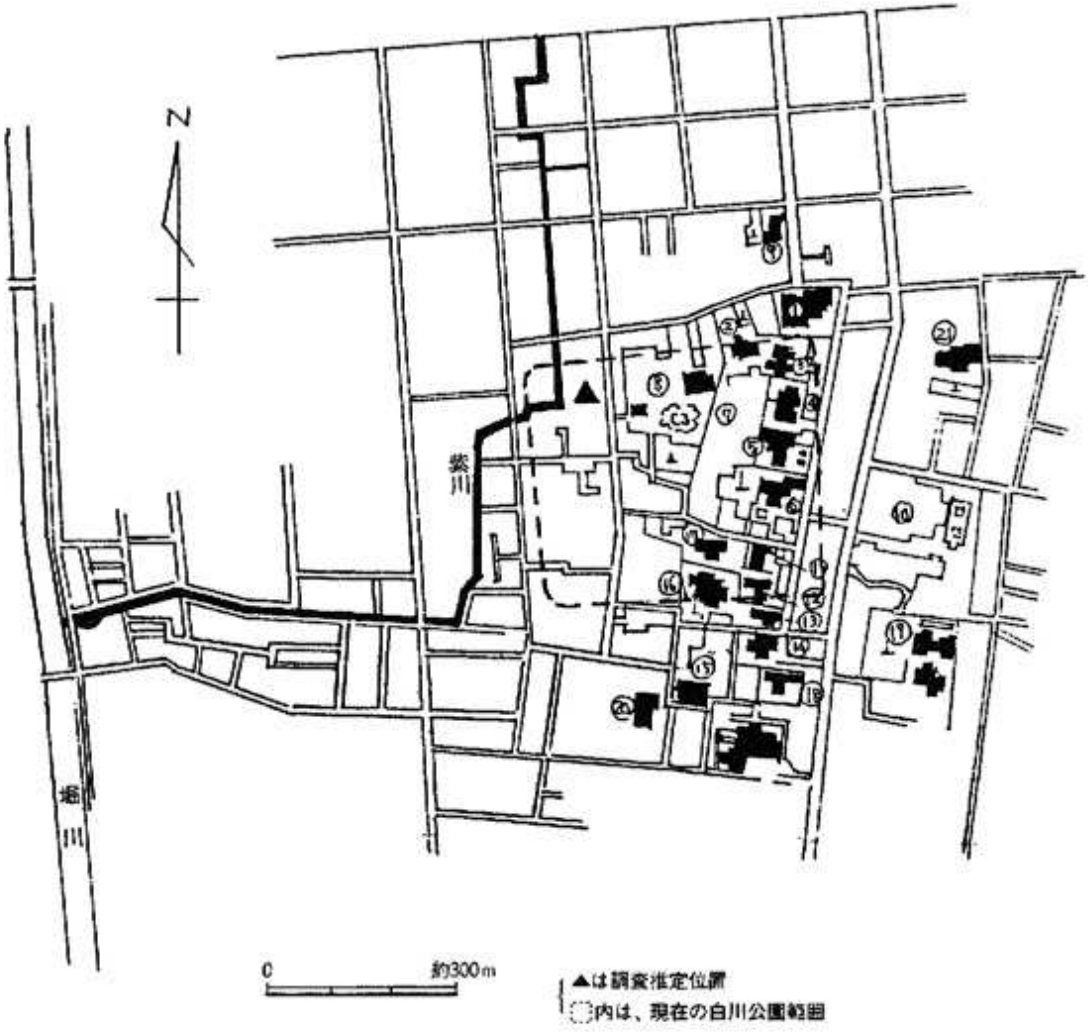
胎で底部裏側に中央から周辺に放射状の削り痕がみられる。所謂、芙蓉手タイプの皿であるが、普通の芙蓉手は口部から底部にかけて施されているのが一般である。芙蓉手は明末の景徳鎮窯の製品で始まりは万暦年間（1573～1619）に始まったとも言われ、対東南アジア、ヨーロッパ向けの貿易陶磁であった。果たしてこの皿が芙蓉手のグループの中に入るのかは疑問であるが同時期の染付であると思われる。明染付が出土した遺跡は他にも幅下遺跡があり、石垣内の建物下の地山直上から下駄と一緒に出土し、佐賀県立九州陶磁文化館の方に見て頂いたところ、17世紀前半のものと御教示を得た。更に、同遺跡から石垣列に沿った南北溝から呉須赤絵碗、皿も出土している。これも明末・清初にかけて大量に貿易された陶磁である。

日本陶磁の内、底部裏側に印銘があるのが数点出土している。同陶磁文化館報で紹介された鍋島藩窯跡から出土した京焼風陶器の一群もある。前述した様に「金村」、「清水」、「清」とあった。そのうち、「清」と丁寧な草書で彫られている碗底部片は釉調、胎土とともに鍋島藩窯製品とは異なっている。釉は灰白色の貫入が細かい長石が混じった灰釉である。恐らく、京焼製品そのものと思われる。その他、灰釉・鉄釉掛け分け碗の底部で同じく高台裏側に扇形の外形線のの中に「清」と押印されているのがある。瀬戸窯製品で定助窯で焼成されたものと御教示を得た。時期も18世紀代前半頃と推定されている。

図　　版

図版1　遺跡位置図（1:5,000）

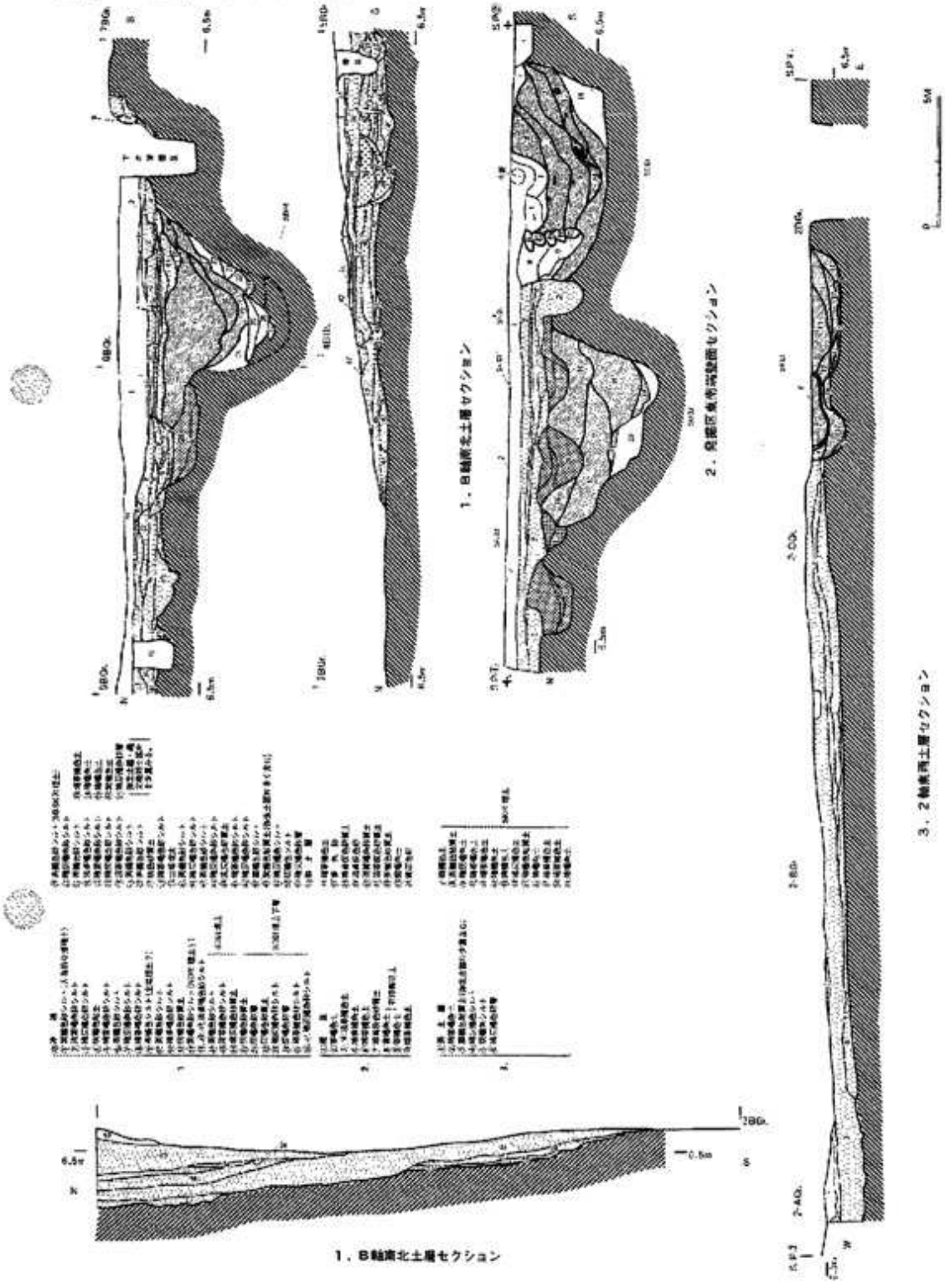
図版２　明治時代遺跡付近図



明治時代区画整理以前の寺の位置

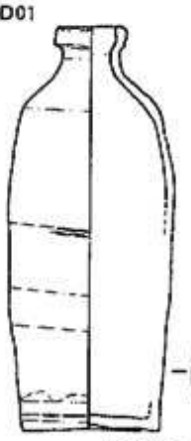
①…光明寺（十王堂）
②…隆正寺
③…熙故院？
④…寿経寺
⑤…誓願寺
⑥…西光院
⑦…黄林寺
⑧…大林寺
⑨…妙行寺
⑩…若宮八幡
⑪…尋盛寺
⑫…瑞宝寺
⑬…法蔵寺
⑭…阿弥陀寺
⑮…大乗院
⑯…徳林寺
⑰…大○寺
⑱…極楽寺
⑲…性高院
⑳…清安寺
㉑…守○寺

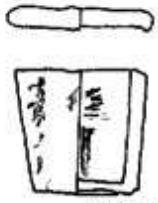
図版３　土層セクション図（1:100）

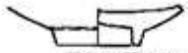


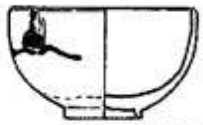
図版4　出土遺物実測図（1：4）

SD01


灰釉徳利


焼塩壺

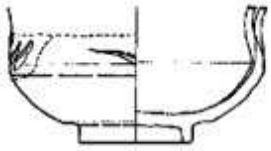

灰釉楼閣山水文皿

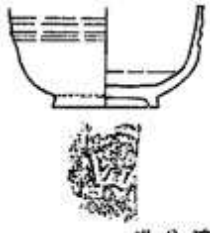

呉須絵碗

灰釉鉄絵鉢

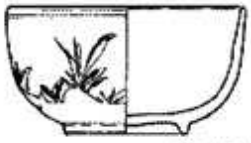
底部墨書

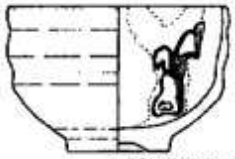
掛分小壺


掛分碗


掛分碗

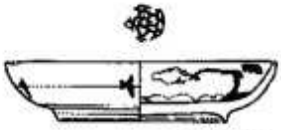
SK01(1C・2C Gr.)

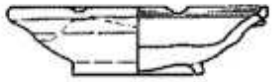

染付碗

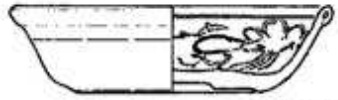

灰釉鉄釉流し碗
(5E Gr. SK01′)

呉須絵広東茶碗

灰釉楼閣山水文皿

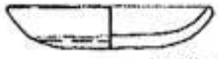

染付皿

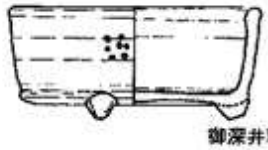

志野織部蝋花皿

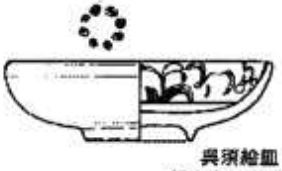

青磁染付皿

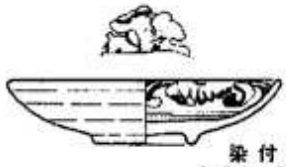
0　20cm

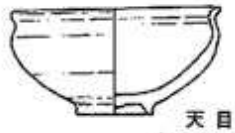
褐釉壺


灰釉皿


御深井釉香炉

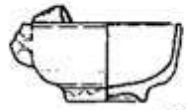

呉須絵皿
(5A Gr. SK03′)


染付皿
(5A Gr. SK03′)


天目碗
(4C Gr. SK04)

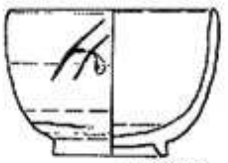
錆釉灯明皿受皿
(3D Gr. SK01)

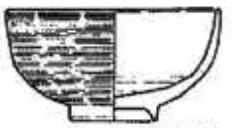
染付広東碗
(3D Gr. SK01)


灰釉汁次
(5C Gr. SK04)

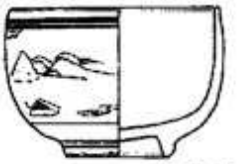
図版5　出土遺物実測図（1：4）

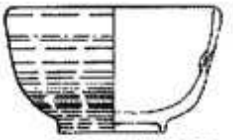
SK02（3C Gr.）

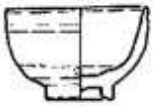

呉須絵碗


鐵釉碗

天目碗


染付碗


掛分碗

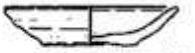

灰釉小碗

灰釉皿

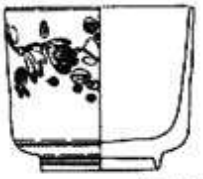
灰釉楼閣山水文碗

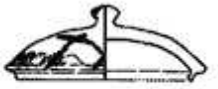
灰釉皿

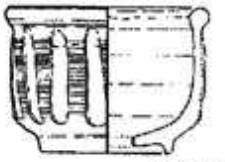
志野小皿


土師小皿

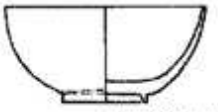
土師小皿

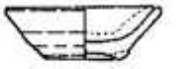

染付火入
（4C Gr. SK05）

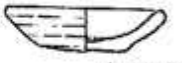

染付蓋
（4C Gr. SK05）


掛分火入（5B Gr. SK05 / 5C Gr. SK04）

刷毛目碗
（5B Gr. SK04）


灰釉楼閣山水文碗
（5B Gr. SK04）

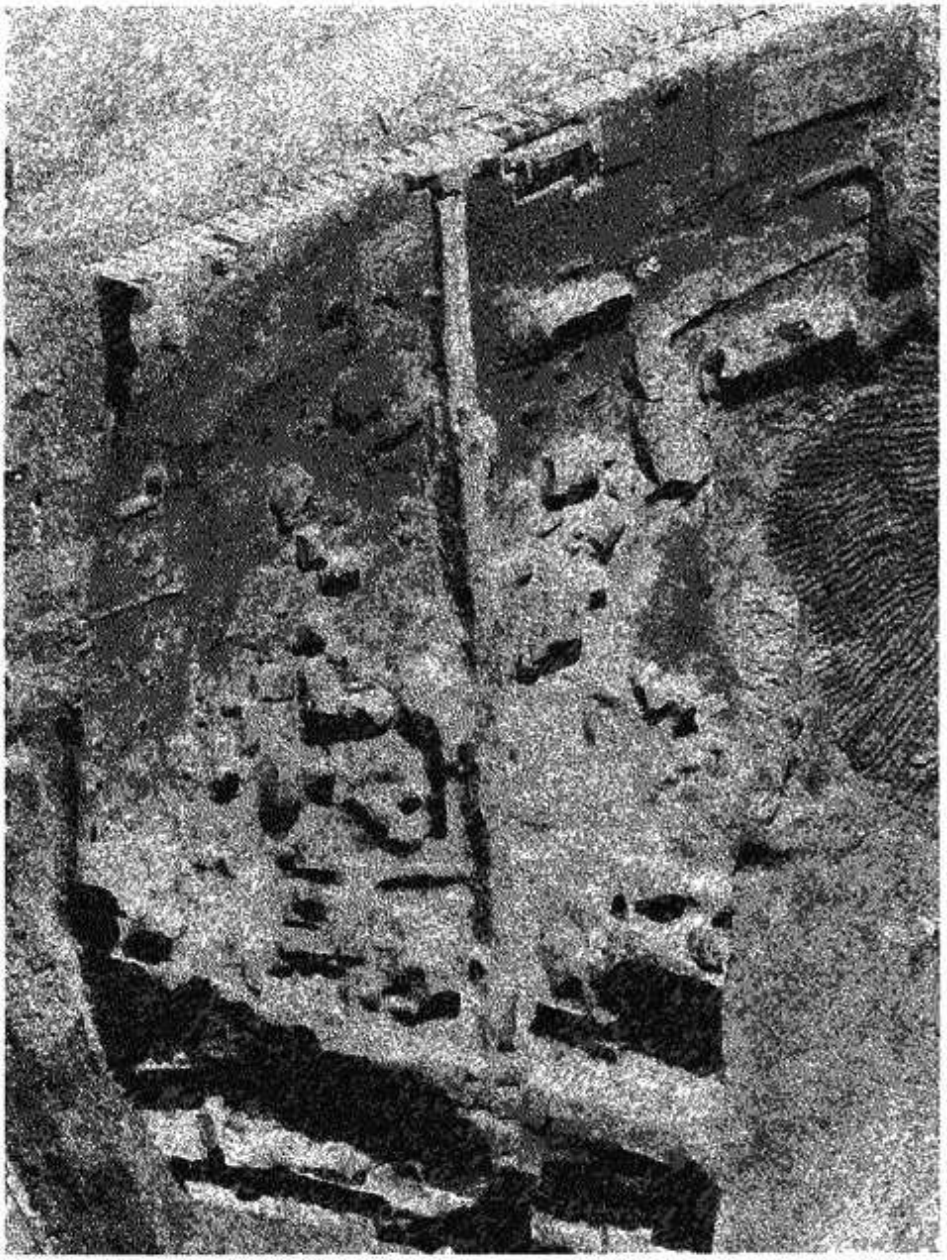

山茶碗小皿


山茶碗小皿

染付皿
（SD03）

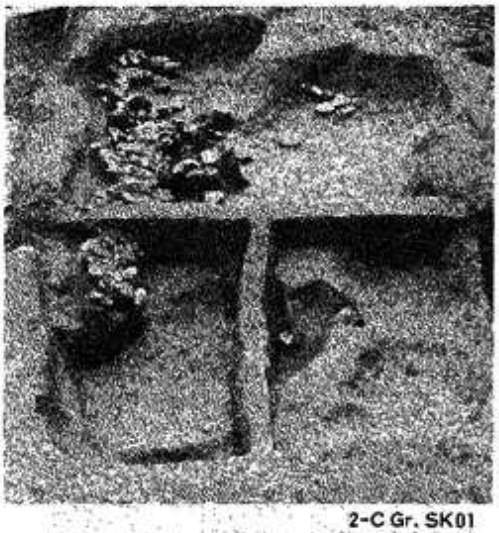
写　真　図　版

写真図版1　発掘区全景



科学館から西を望む

写真図版２　遺構及び検出陶磁器群



2-C Gr. SK01

SD01 全景（西側から）

2-C Gr. SK01 陶磁器群

SD01 埋土断面

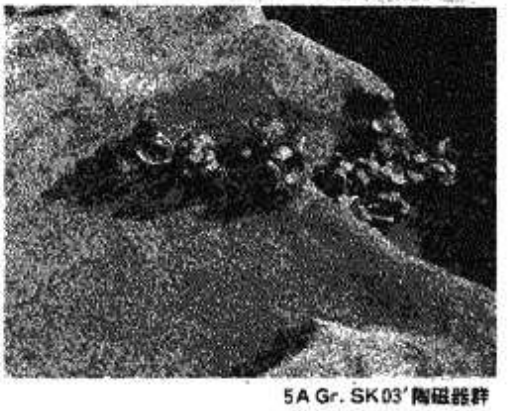
SD01 下層出土陶磁器群

SD01 下層出土陶磁器群

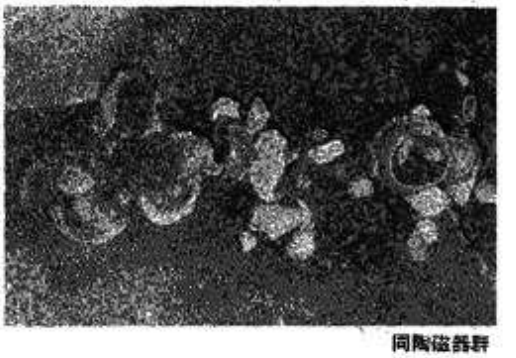
写真図版３　陶磁器群・石垣

SD01 陶磁器群

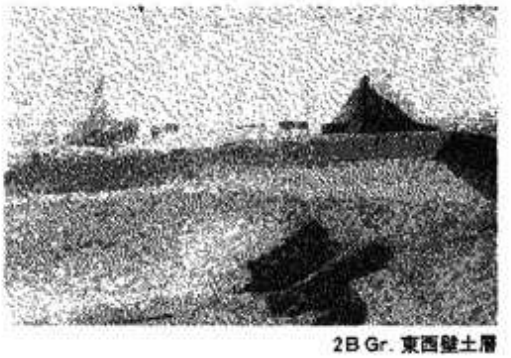
同陶磁器群



5A Gr. SK03' 陶磁器群



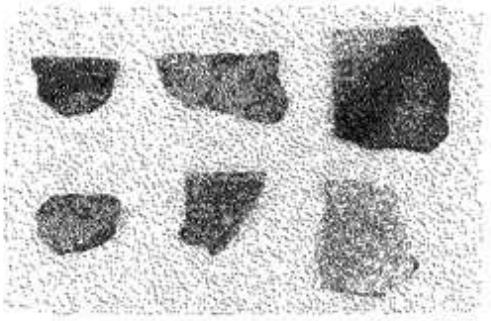
同陶磁器群



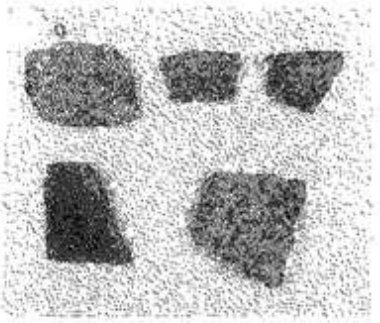
2B Gr. 東西壁土層

石　垣

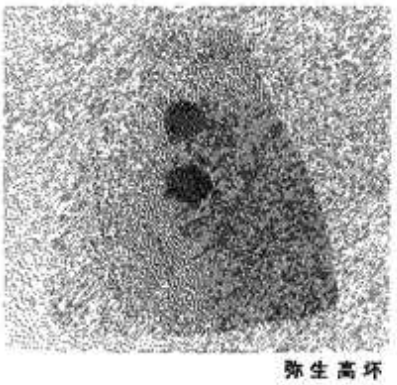
写真図版4　出土遺物（包含層）



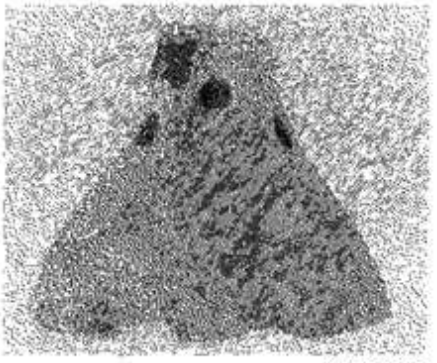
縄文土器



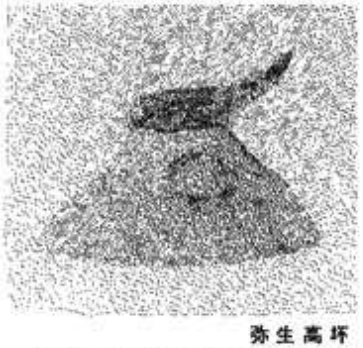
縄文土器



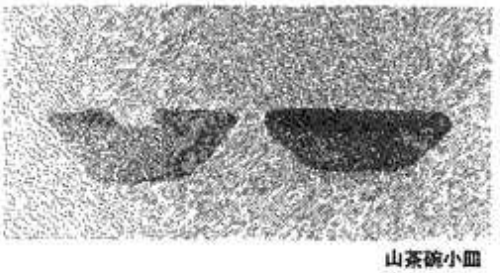
弥生高坏



弥生高坏

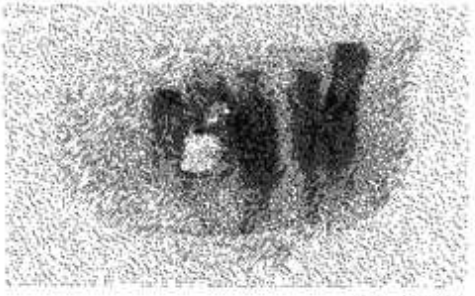


弥生高坏



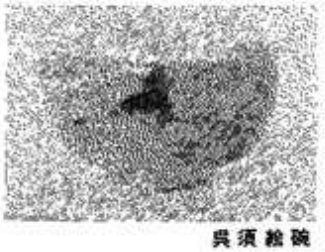
山茶碗小皿

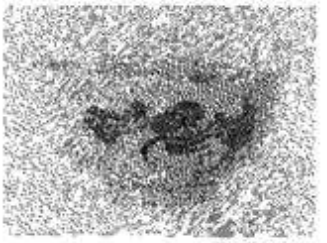
褐釉手付水注

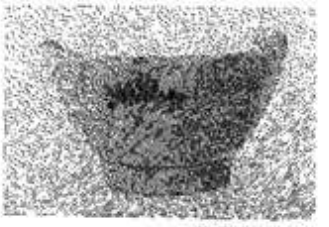


灰釉碗

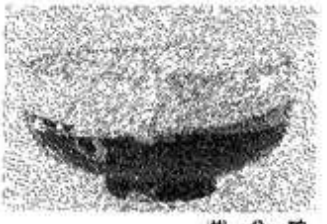
写真図版5　出土遺物（SD01）

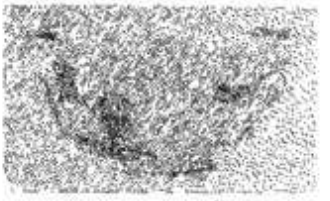

呉須絵碗


呉須絵碗


呉須絵広東碗

鉄釉挽骨茶碗

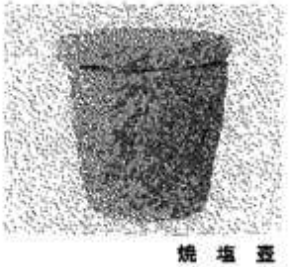

掛分碗


染付碗

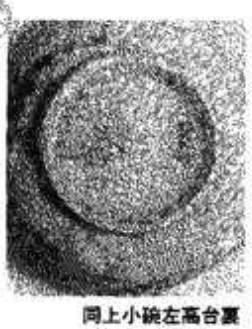
掛分小壺

染付猪口

焼塩壺


焼塩壺

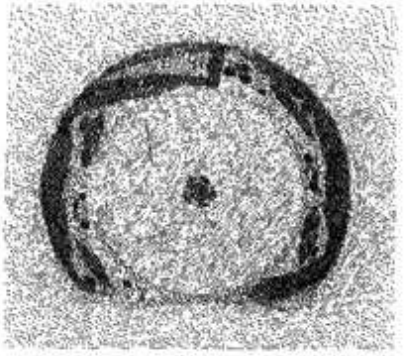
志野絵小碗


同上小碗左高台裏

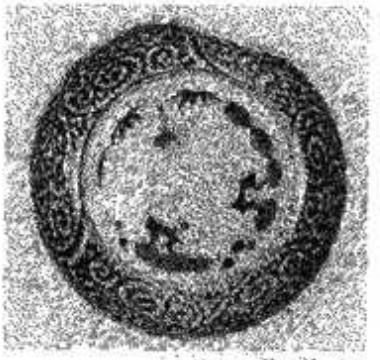
染付徳利

灰釉徳利

写真　写真図版６　出土遺物（SD01）

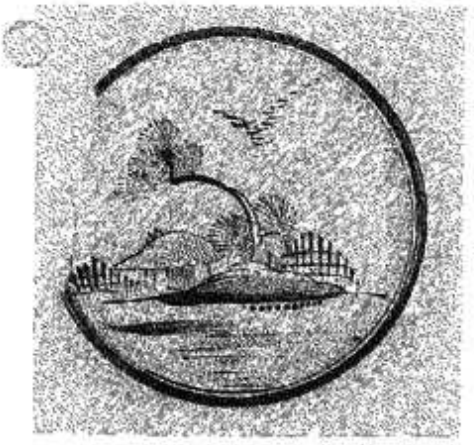


染付皿



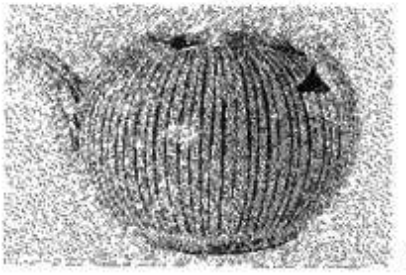
染付皿

志野絵徳利

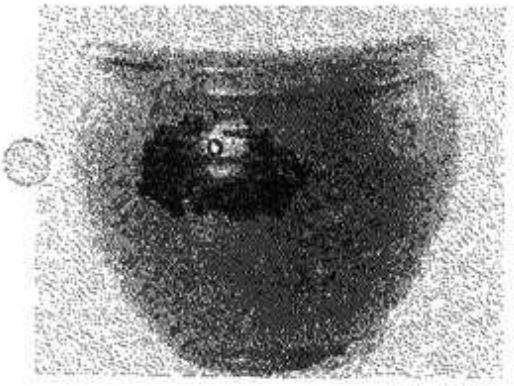


鉄絵皿

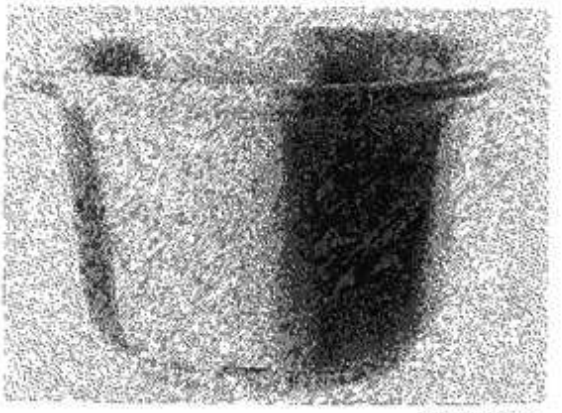
染付皿



変塩手急須

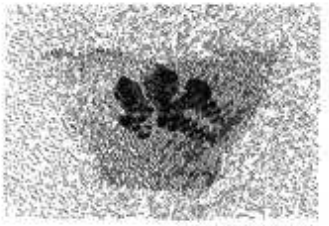


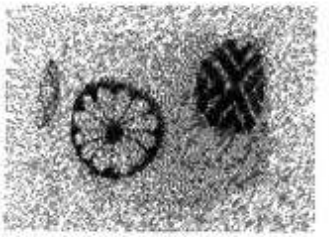
鉄釉甕



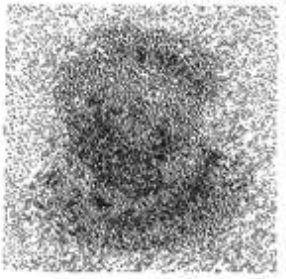
銅緑釉流し鉢

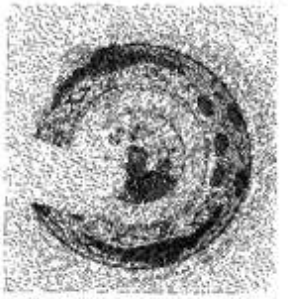
写真図版7　出土遺物（1・2C Gr. SK01）

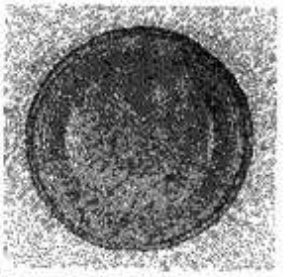

呉須絵広東茶碗

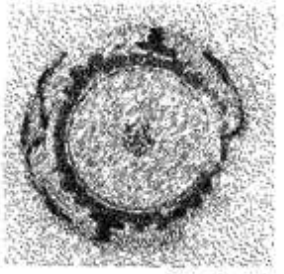

染付碗

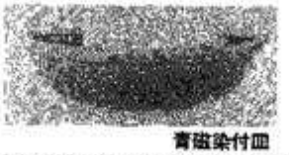
染付碗


菊皿

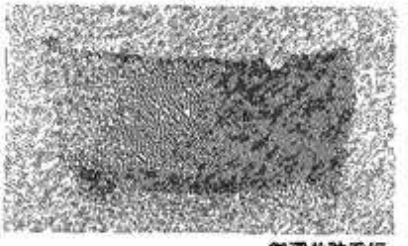




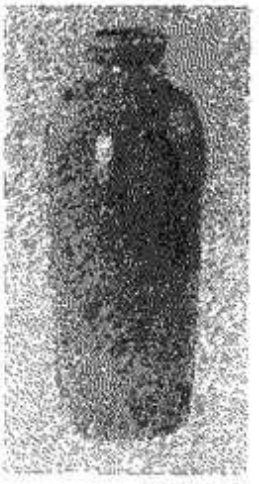

染付皿

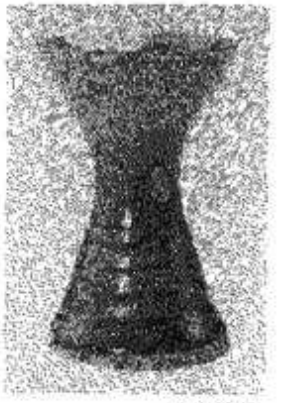

青磁染付皿

志野織部釉花皿


御深井釉香炉

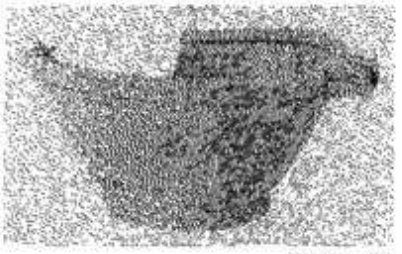
焼塩壺

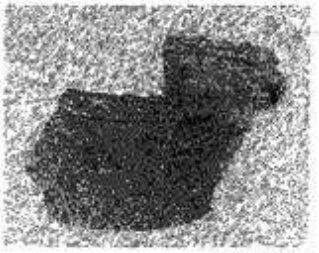

灰釉徳利


灰釉花瓶

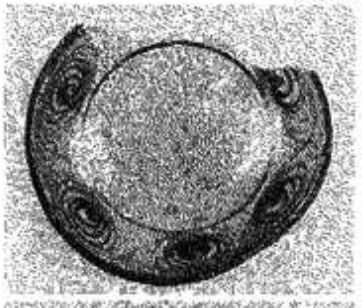
甕

写真図版８　出土遺物（1・2C Gr. SK01・3C Gr. SK02）

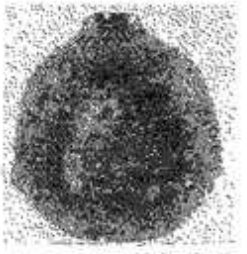

灰釉片口鉢

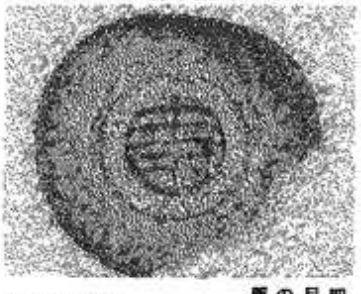

灰釉片口鉢

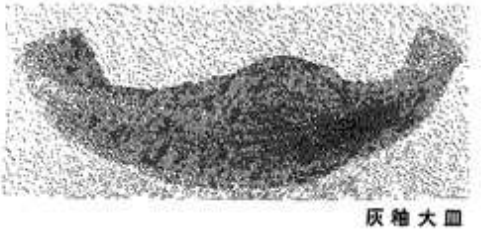
御深井釉汁次



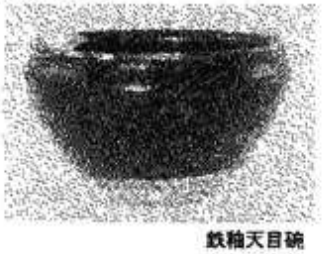
馬の目皿

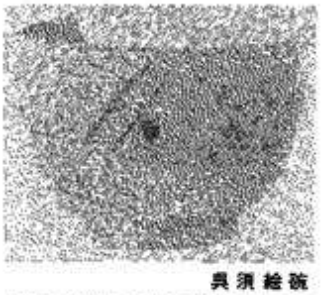

鉄釉徳利

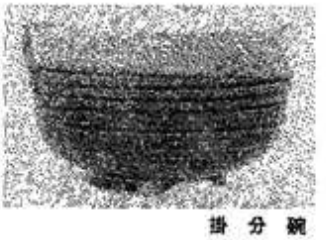

馬の目皿

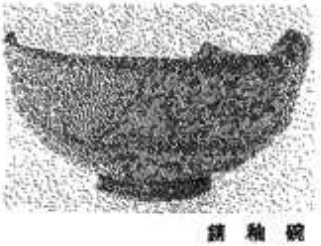

灰釉大皿

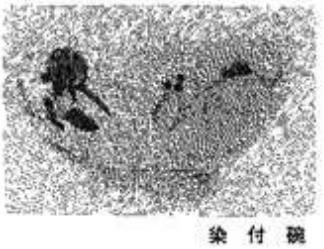
SK02（3C Gr.）

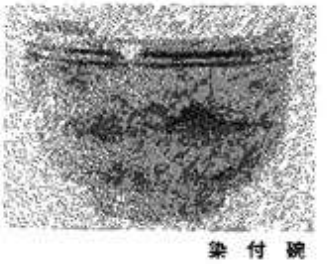

鉄釉天目碗


呉須絵碗

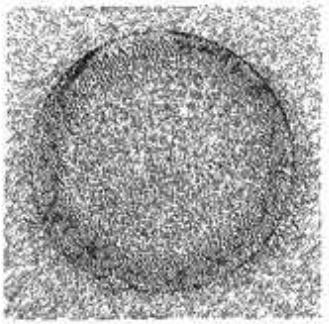

掛分碗


錆釉碗

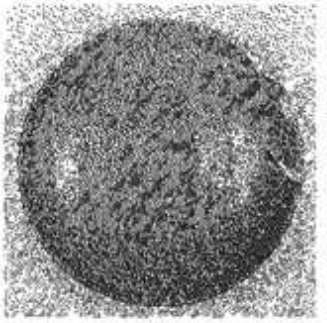

染付碗


染付碗

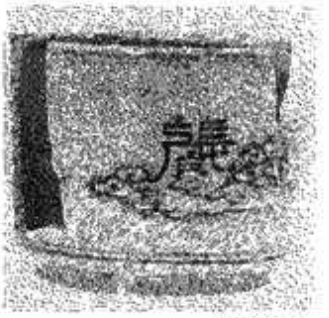
写真図版９　出土遺物（3C Gr. SK02・3D Gr. SK01・5A Gr. SK03′）



志野小皿



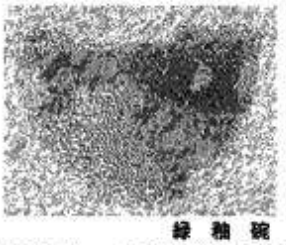
灰釉皿



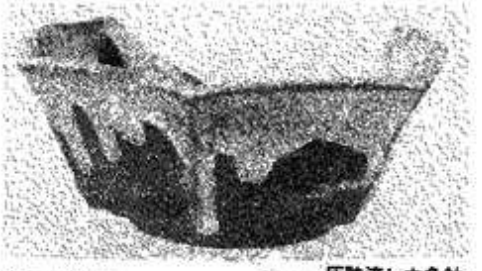
呉須絵火入

灰釉花瓶

SK01



緑釉碗



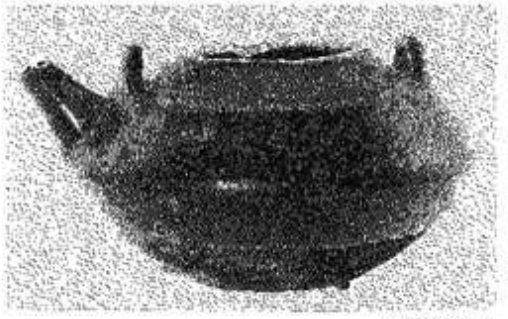
灰釉流し六角鉢

緑釉輪花碗

染付碗

染付広東茶碗

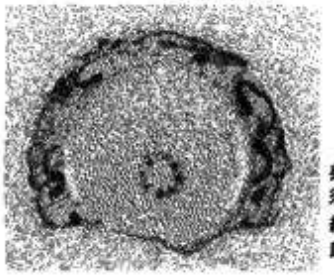
SK03′



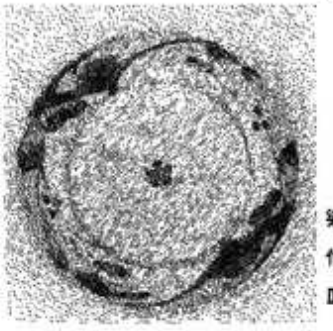
鉄釉土瓶

鉄釉鍋

焼塩壺



呉須絵皿



染付皿

写真図版10　出土遺物（各種遺構）

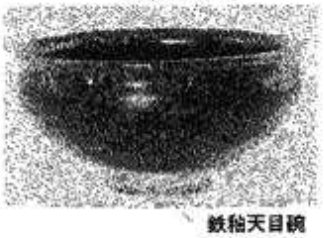
SK03′（5A Gr.）

鉄釉四耳壺

鉄釉徳利

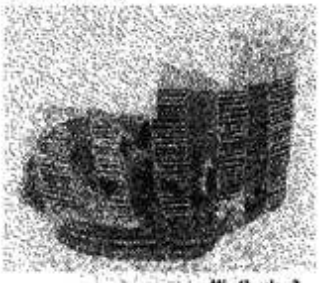
SK04（4C Gr.）

鉄釉陶製釣燈籠

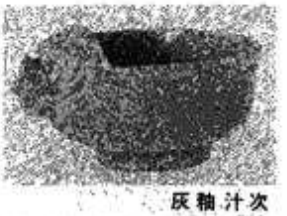


鉄釉天目碗

SK04（5C Gr.）



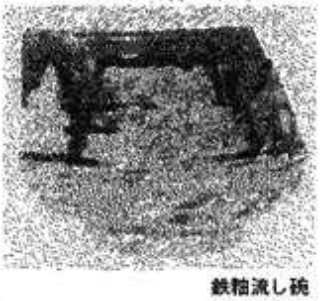
掛分火入



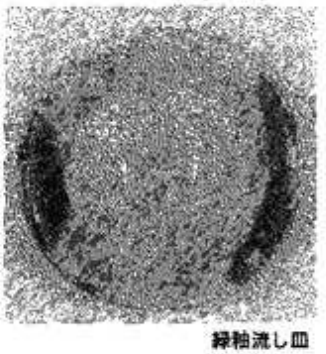
灰釉汁次

SK01（4E Gr.）

刷毛目文碗



鉄釉流し碗

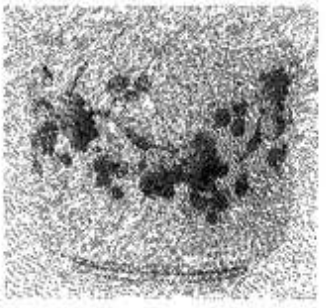


緑釉流し皿

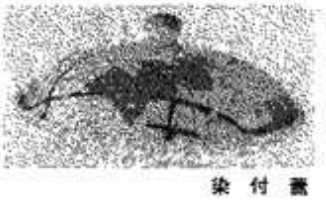
SD03

染付皿

SK05（4C Gr.）



染付火入



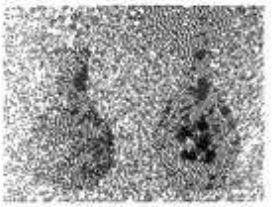
染付蓋

写真図版11 出 土 遺 物

SK05(5B Gr.)

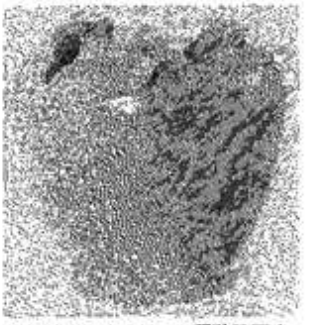
掛分小壺

右SD01・左SK01(3D)



灰釉(左)・染付(右)小瓶

SK04(5E Gr.)



SK01′(5E Gr.) 灰釉双耳壺

SD01

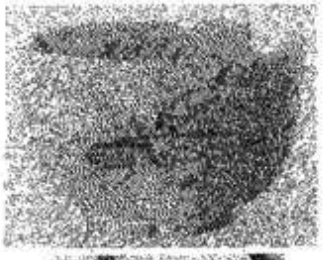
灰釉徳利

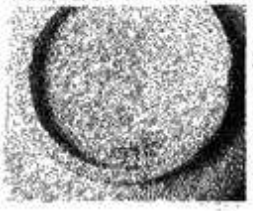
SK01′(5E Gr.)

鉄釉摺鉢

灰釉碗

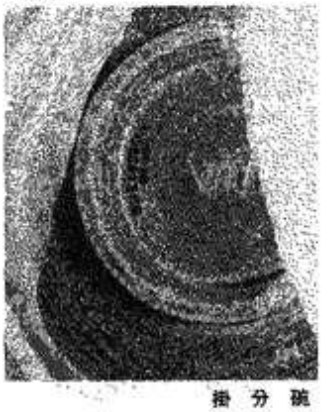
SK02(3C Gr.)





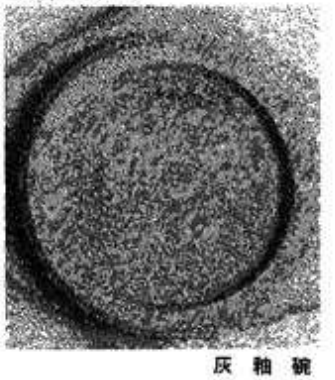
灰釉鉢酸山水図碗

SD01

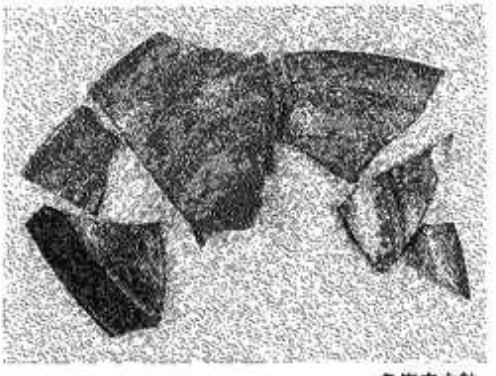


掛分碗

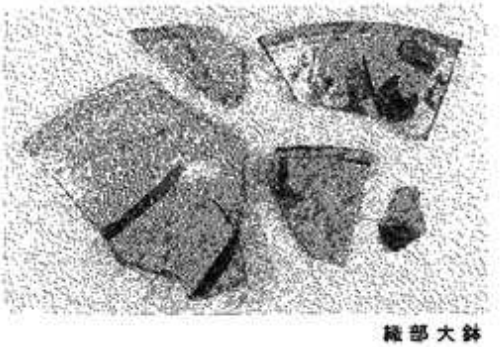
SK01(2C Gr.)



灰釉碗



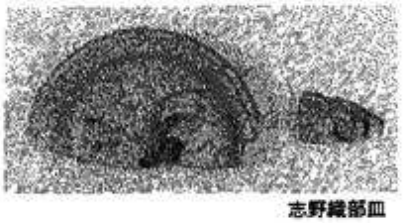
象嵌文大鉢



縁部大鉢

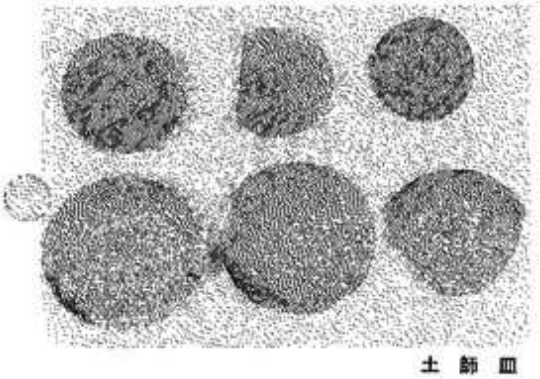
写真図版12　出　土　遺　物

右(SK01 2C Gr.)・左(SD03)

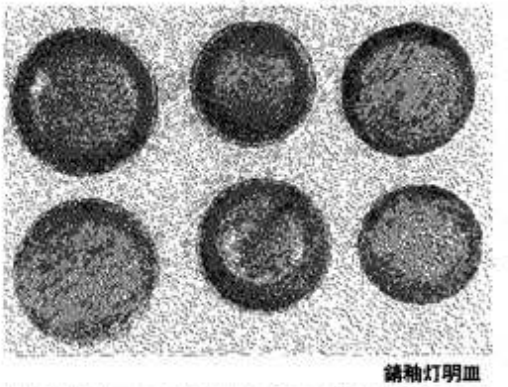


志野織部皿

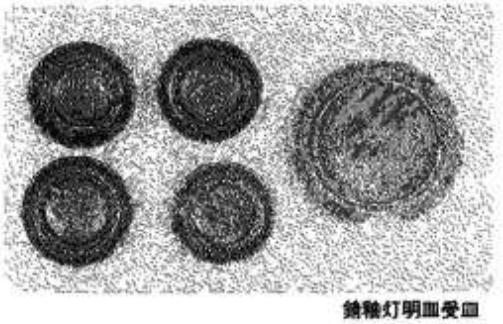
灰釉香炉



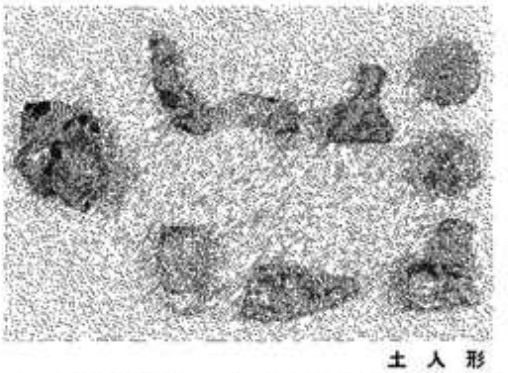
土　師　皿



錆釉灯明皿

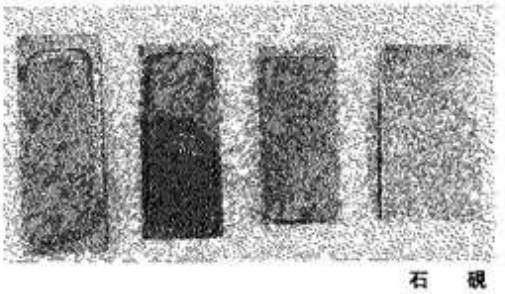


錆釉灯明皿受皿

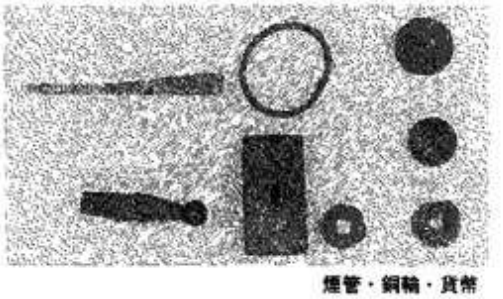


土　人　形

右 割高台碗・左 戸車



石　硯



煙管・銅輪・貨幣

昭和62年３月
中区栄二丁目白川公園所在
白川公園遺跡第２次発掘調査概要報告書
編集兼発行　名古屋市教育委員会
印　刷　所　株式会社刈谷高速印刷